



2008 年 (平成 20 年)

10 月号 (No. 761)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目 次

雪崩から生還、GⅡ、ブロード・ピーク 登頂で8000メートル峰11座に 登頂した竹内洋岳……………	1
第2回学生交流登山で岩登り 韓国・仁壽峰などで実施……………	4
大日岳の事故と事件の真の姿 竹勝生氏の間違いを正す……………	5
追悼 太田敬氏、川崎精雄氏……………	7
活動報告……………	8
自然保護委員会／三水会 東西南北……………	10
ヘルマン・プール夫人との会見 クマと格闘して生還した登山家の 山野井泰史さん 曾祖父、梨羽時起のこと 支部だより……………	12
北海道／岐阜 図書紹介……………	14
会務報告……………	16
ルーム日誌……………	17
会員異動……………	17
新入会員……………	17
INFORMATION……………	18
図書受入報告……………	18
さんけん通信……………	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 …… 10～20時
水・金 …… 13～20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時

雪崩から生還、GⅡ、ブロード・ピーク 登頂で8000メートル峰11座に 登頂した竹内洋岳

柏 澄子

GⅡの大規模雪崩から生還し、今夏、GⅡとブロード・ピークに登頂した竹内洋岳さん。マナスル東稜から始まった8000メートル峰登山の多くが無酸素登頂で、近年は外国人と組んで小規模隊で登ることが多かった。

わかりやすいキャッチフレーズをつけるとしたら「8000メートル峰14座にもっとも近い日本人」竹内洋岳(37歳、元日本山岳会会員)。昨夏、彼はガッシャブルムⅡ峰(GⅡ)で大規模な雪崩に遭遇し、重症を負った。帰国直後、入院先で顔を合わせたとき、あまりの痩せた姿とその力のなさに、最初は驚いた。竹内はもともと細身である

が、細さのなかに力強い雰囲気をもった人であったからだ。それだけに、彼の姿を見て、改めて雪崩の規模の大きさと、そこから生還できたことがどんなに貴重だったか思い知った。

しかし一方で、彼はそのときすでに「来年、GⅡからやりなおします」とも話していた。どんな重症であつても、竹内には希望があつ

た。なぜならば、彼はすでに死のどん底から這い上がり、最悪の事態を脱し、生き延びてきたからだ。

奇跡の救出、命のリレー

竹内が雪崩に遭ったのは、GⅡのC2上部である。2007年7月18日、仲間3人とともに、ルート工作に当たっていた。そのときに、大規模な雪崩が発生した。

惨事を目撃した別の隊の登山者によると、竹内たちが登っていたまさにその場所から雪面が崩壊するのが見え、そしてそれは爆音となって響き渡ったという。山肌から雪面全体が剥がれ落ちるような大崩壊が起きたのだ。やがて雪崩が収まったあと、竹内は彼らに救助された。彼はおよそ300メートル転落していた。鼻で荒く呼吸し、苦

痛のために絶叫していたという。医師であるスイス人登山者が、竹内ら3人にモルヒネを与え、ドイツ人登山者はC2から酸素ボンベを荷揚げし、吸わせた。C2までの距離は長くはなかったけれど、急峻で曲がりくねった細い雪稜だったため、彼らを搬送するのは困難を極めた。その間、ひとりの男性は、息を引き取った。もうひとりの男性は、介添えをすれば自分の足で歩けるほどだった。別のひとりとは行方不明になっていた。

ヘリコプター救助を依頼したが、飛来したものの竹内たちを収容することはできなかった。竹内は、周囲に看病されながら、標高6500メートルのC2で一夜を明かさなければならなかった。それは彼が死に近づくことをも意味していた。

シユラフやダウンジャケットで保温し、鎮痛剤を投与し、たった1本しかない酸素ボンベから酸素を吸入した。ときおり竹内はあまりの痛みに叫び声を上げ、酸素マスクを引き離そうとしたが、そのたびに周囲は、マスクを彼の口元に戻したほどだ。

呼吸が止まることもあった。すぐさま心肺蘇生をすると、息を吹き返す。上半身を起こし、浅く早い呼吸を繰り返しながら、やがて呼吸数は加速度的に増加し、そしてまた突然呼吸が止まる。こんなことが何度も繰り返された。竹内本人にとっても、また周囲にとっても「拷問」のような一夜だった。

夜が明けても、耐え難いほど辛い時間はなお続いた。C2にいても埒が明かないと判断した登山者たちは、竹内をC1まで搬送した。別の商業公募隊のガイドや日本隊のシエルパは、酸素ボンベをC1まで荷揚げした。

結局、竹内がヘリコプターに無事収容されたのは、事故の翌々日、20日のことだった。スカルドに向かって飛び立つヘリコプターに乗った竹内が、親指を立てた拳を高く上げて振ったのを、C1から見

送った彼らは、しっかりと見ていた。2日にわたって生死をさまよった彼が、最後の力を振り絞って、みんなに感謝の意を表わしたのだ。その後、スカルドの病院からイスラマバードに飛行できたのが25日。日本帰国は30日だった。

山の中で、全力で救助と看病に当たってくれた登山者たち、スカルドに駆けつけた日本の友人、イスラマバードでサポートしてくれた医師や旅行会社、日本の留守本部や待機した何人もの医師たちなど多くの人に恵まれて、竹内は生還した。竹内本人の言葉を借りれば、彼ら全員が、まさに「命を手渡しでリレー」をしてくれたのだ。

半年後の雪山

日本で診断した結果、竹内のケガは、肋骨5本の骨折と腰椎3番の破裂骨折だった。手術をし、約1カ月間入院をした。

その後、着々と復帰していった。11月にはイスラマバードに渡り、世話になった関係者たちに元気な姿を見せた。

「事故後半年以内には山を登ることに決めていた。登山ができることを、周囲にも自分自身にも示し



7月8日、昨年の雪辱を果たしGⅡ頂上に立つ竹内(右)

たかった」と話していた通り、翌年1月には八ヶ岳・赤岳主稜を登った。サポートしたのは山岳ガイドの花谷泰広だった。荷物は持たなかったというが、最終ピッチは、ロープのトップに立ち、登頂した。痛みもなく、順調な登山だった。

八ヶ岳のあと、山に行くことはなかった。翌夏のGⅡまで「体力温存」に入っただという。もともと最近は毎年のようにヒマラヤで過酷な登山を繰り返していたため、日本ではハードな登山やトレーニングをするよりも、疲労回復、休養などのコンディショニングに努めている。こんなに短期間で山に戻る体作りをしたことについて、竹内はあまり多くを語らない。

本当に地道にリハビリを続けたのではないだろうか。

魂をおいてきたあの場所から

8000^ト峰14座は、雪崩に遭ったあの場所から、1年後に再開する。竹内ははじめからそう決めていた。それは、途中で帰ってきたその頂にまずは立ちたい、多くの人に助けられたGⅡに戻りたいという思いからであつたが、「自分の足で下りていないことが気持ち悪い」とも話す。自分の心も体も、まだGⅡのあの場所に置き去りにしたままのような感覚になることがあるという。

しかし、それはそんなに簡単なことではなかった。果たしてBCまでたどり着けるのかすら、竹内本人にもわからなかった。

しかし駒を進めるうちに心配事はひとつひとつ消えていった。悪路として名高いカラコルムハイウェイの、丸2日間に及ぶドライブにも耐えることができた。そして1週間かけてバルトロ氷河のキャラパンを歩きとおし、BCにたどり着いた。目の前のことをひとつひとつこなしていくうちに、山が見えてきて、頂が近づいてきた。



7月31日、ブロード・ピーク頂上直下を登る竹内

登山活動は連日の降雪に見舞われ容易ではなかった。しかし、01年のナンガ・パルバット以来の仲間であるベイカー・グスファッソン、平出和也と一緒に7月8日、頂上に立った。山頂は無風快晴だったが、ほどなくブリザードに変わった。

GⅡ登山を終えたあと、竹内たちはブロード・ピークに向かった。このように高所登山を継続することを、竹内は「HAM」(High Altitude Marathon)と呼んでいる。これまでも竹内は、チョモランマからK2へ、アンナプルナからガッシャブルムI峰へとHAMを成功させたことがある。またほかのほとんどの年もHAMを試みてい

る(表参照)。高所に順応した体を活かして、次の山も登ろうという考えだ。無論そこには疲労回復とバランスが必要だが、自国に戻って出直すよりもパワーと時間、費用を節約できるので効率がよい。3人がブロード・ピークに登頂したのは、7月31日。これで、ベイカーと頂上を分かちあったのは4度目となった。

GⅡとブロード・ピーク、この2座のノーマルルートからの登山について、特筆することはない。しかし、竹内にとっては、雪崩事故と大ケガを乗り越えて手中にした特別の頂上となった。

14座がすべてではない

竹内には、「14座の数字」を追っているような印象はない。彼ははっきりと「14座は私の登山のなかの一部であって、ましてや私の人生を考えると、もちろんそれはすべてではなく、ごく一部」と言う。今回同行した平出が「こんなに大勢のヨーロッパ人が14座を目指していることに驚いた。14のピークだけでなく、それを取り巻く環境すべてを楽しんでいるように見える」と語った。竹内も同様だ。

最初は、ヒマラヤの大きな氷雪嶺にただただ憧れていた。登り続けるうちに、ヒマラヤの高峰がどんなに魅力的なものか知った。「フィートの単位でみれば違う区切り方になるのだから、14座はきわめて偶然のもの。しかしそれらはみな魅力的な山である。山容は大きくすばらしい。登ってみると個性的でおもしろい。登山史も興味深く、それも山の魅力である」と話す。8000メートル峰を登るうちに自然と14座が見えてきた。

竹内の強みは、大規模登山隊と、近年彼がともにしている友人同士の小さな隊の両方を経験していることだ。アルパインスタイルが至上とは思っていない。そのときのルートとメンバーにいちばん合った方法で登るのがよいと考えている。

日本だけでなく、外国の友人にも恵まれた。各国の登山の歴史、文化も知ることができ、登山の幅が広がった。とくに転機となったナンガ・パルバットで知り合った国際

山岳ガイドのラルフ・ドゥイモビッツは、竹内のクライマーとしての強いモチベーションと身体能力、それと人柄を信頼している。

14座に限れば残すのは、ローツエ、チョ・オユー、ダウラギリの3座だ。それぞれをどのルートからどんなスタイルで登るのか。これまで同様、竹内自身が楽しめてやりがいのあるユニークな方法を考え出すのではないだろうか。

年 月	山 名	結 果	隊名/主なメンバー
1991.9~10	シシヤバンマ	登山	大学山岳部隊
1995.5.22	マカルー	登頂(東稜下部初登攀)	日本山岳会隊
1996.5.17	チョモランマ	登頂(北稜)	大学山岳部隊
1996.8.14	K2	登頂(南南東リブ)	日本山岳会青年部隊
2001.6.30	ナンガ・パルバット	登頂(ディアミールフェイス キンスフォッファールート、無酸素)	国際公募隊
2003.4~5	カンチェンジュンガ	北面、7500m地点まで	ラルフ、ガリンダ、ベイカーら5名
2004.4~5	シシヤバンマ	南西壁6500m地点まで	ラルフ、ガリンダ、竹内
2004.5.28	アンナプルナI峰	登頂(北面、無酸素)	ラルフ、ガリンダ、竹内
2004.7.25	ガッシャブルムI峰	登頂(無酸素)	ラルフ、ガリンダ、竹内
2004.7	ガッシャブルムII峰	悪天候のため登山中止	ガリンダ、竹内
2005.5.7	シシヤバンマ	登頂(南西壁~北面、無酸素)	ラルフ、ガリンダ、竹内
2005.5	チョモランマ	中央ロンブク氷河側~北稜、7700m地点まで、一時意識を失いパートナー達の看護のもと無事下山	ラルフ、ガリンダ、竹内
2006.5.14	カンチェンジュンガ	登頂(北面、無酸素)	ラルフ、ガリンダ、竹内
2007.5.19	マナスル	登頂(北東面通常ルート、無酸素)	国際公募隊、ラルフ
2007.6~7	ガッシャブルムII峰	通常ルート7000m地点で雪崩に遭い大ケガ、救出される	国際公募隊
2008.7.8	ガッシャブルムII峰	登頂(通常ルート、無酸素)	ベイカー、平出、竹内
2008.7.31	ブロード・ピーク	登頂(通常ルート、無酸素)	ベイカー、平出、竹内

トピックス

第2回学生交流登山で岩登り
韓国・仁壽峰などで実施

野邊慎吏

第2回目・中・韓交流登山が8月17日から24日まで韓国の北漢山インスボンソククラサン仁壽峰と雪嶽山で行なわれた。白馬の梅池に35人が集まった第一回後も交流が続いており、早く次回をやりたいという声が高まっていた。その熱い要望に韓国側が応え、わずか半年で第2回交流登山の開催となった。

この交流登山計画は2007年10月、宮下会長が韓国山岳会62周年記念のお祝いに訪韓した際、韓国山岳会の崔会長、中国登山協会の李副主席に提案して始まったもので、今回は岩登りを中心に計画が立てられ、日本から9大学11名の学生が韓国に飛んだ。

17日、インチョン空港に到着し中国メンバー7名と合流する。中国はクライミングの中国チャンピオンを含むトップ選手達が参加しており、体格のよさに圧倒された。その後バスでソウルに移動し、韓国メンバー12名に迎えられた。韓

国のなかには前回の参加者が6名おり、抱き合って再会を喜んだ。

それぞれの登り方で

18日。あいにくの雨となったが、韓国チームはスラブを登ると言っている。断固反対して、ハイキングとなった。北漢山はクライミングのメッカであるとともに景勝地でもあり、一枚岩に雨が流れる様子は美しかった。ルートの下見をし、終了点が見えないほど大きなスラブを前に一同唖然。しかも支点は一つもないという。不安を胸にシュラブに入った。

19日晴れ。ソウルの美しい町並みが一望にできた。この日は各国混合で5つの班に分かれ、マルチピッチクライミングを行なった。

噂に違わず支点が少なく、雨で濡れているのと相まって、エキサイティングな登攀となった。ところどころ5・10台のピッチがあり足が震えるほど怖いのだが、韓国人は笑い声を上げながらガンガン登



日・中・韓3国の学生が韓国で再会した

り、中国人は雑技団のようにスイスイ登っていく。しかし、彼らのビレイの仕方、終了点の作り方はとても危なげで、われわれがここぞとばかりに指導した。

20日、この日はスポーツルートとクラシックルートクラシックの二隊に分かれた。スポーツルートはつるつるのフェースで、やはりピンも少なかった。しかし登ってみると、ホールドが限られているので見た目ほど難しくはなかった。

下山後は噂に名高い「アイスクライミングジム」を見学した。まずその大きさに驚いた。地下三階から地上四階まで、聳え立つ壁はギネス認定の世界最大ということ

である。YMCAに帰り、三晩つぎの宴会となった。

21日、雪嶽山で縦走をする。登山道は韓国軍が整備したらしく、とても立派なものだった。ライフル銃の弾が落ちていて、南北朝鮮の厳しい現実を垣間見る思いがした。縦走中は英、日、韓、中4カ国語で「しりとり」をしながら歩を進めた。5時間歩き、大青峰(1708メートル、韓国第3位)に到着。日本海(韓国では東海と呼称しているようだ)を望むことができた。

夜は2つの小屋に分かれて泊まった。付き添いの理事の方々と同じ小屋では、いつもは賑やかな韓国学生が押し黙っている。さすが儒教の国だ。

22日、奇岩の間を縫って縦走する。猛烈な雨で韓中メンバーはうんざりしていたが、日本人は慣れたもので歌声をあげて進む。ずぶ濡れで小屋に到着。いつも辛くて食べられない「辛ラーメン」が冷えた体には有難かった。

来夏は中国・青海省で

23日、30分ほどで下山し、バスでソウルのユースホステルに移動、観光となった。近くでお祭りをやっており、韓国相撲や蹴鞠などを

体験した。大縄跳びコーナーや大道芸のステージに参加して、祭りを盛り上げた。その後の歓送会では、第3回交流登山が来年夏、中国の青海省で開催されることが発表された。日本の雪、韓国の岩につづいて中国の高山である。

24日。別れの朝。自然と涙が出る。この涙や寂しさが、交流登山成功の証である。それぞれに思い入れのある登山道具を交換し、再び会う日まで相手に預けた。

オピニオン

大日岳の事故と事件の真の姿 竹勝生氏の間違いを正す

松下征文 (京都支部)

会報『山』9月号、オピニオン欄に竹勝生氏から「北アルプス大日岳の事故と事件の謎」という一文が寄せられた。前々号の重廣恒夫氏の「早期再開が待たれる大学山岳部リーダー冬山研修会」を読んで、『北アルプス大日岳の事故と事件』(斎藤惇生・編 ナカニシヤ出版)に抱いた疑問が再燃したという。竹氏の疑問はふたつ。ひとつは今後の事故予防策、ふたつ目

*

この交流登山を通じて各国の登山活動の状況や、異なった登山技術を経験することができた。互いにより刺激になったと思う。貴重な経験を持ち帰り、学生登山のさらなる発展に繋げるよう尽力していきたい。

交流登山で得た友人達は、またよきライバルでもある。切磋琢磨できる友人を得たことがとても嬉しい。

は日本山岳会の体質にかかわることであるとして、議論を展開しているが、いずれも事実誤認に基づく間違いであると考えてる。

小論の筆者は「山本、高村両君を支援する会」に参加してきた。また、大日岳事件の研究に携わり、その成果を『北アルプス大日岳の事故と事件』編集委員として、とりまとめに当たった。大日岳の事故と事件について愚見を申し述べ、

竹勝生氏の間違いを正したい。

事故は2000(平成12)年3月5日、大日岳の山頂付近の積雪(多くの人は雪庇と呼んだ)が大規模に崩壊して、大日山谷に4^キの雪崩を惹き起こした。ちょうどそのとき、山頂付近にいた文部省(当時)登山研修所(文登研)主催の大学山岳部リーダー冬山研修会の一行のうち、11名が巻き込まれ、2名の研修生が行方不明になった。懸命の捜索の結果、ふたりは5月と7月にそれぞれ遺体となって発見された。これが事故である。事故の経過については前掲の『北アルプス大日岳の事故と事件』に詳しく書かれているので、ここでは繰り返さない。

秋田谷英次元北大低温科学研究所長を座長とする事故調査委員会が組織された。「雪庇」崩落事故が詳しく検討された。その結果、山頂付近の雪庇崩落は予測不可能であったと結論した(01年2月)。これを根拠に文部科学省は国には責任がないと主張した。文科省のこの対応を不服として、亡くなったふたりのご遺族が国の責任を問う損害賠償請求の民事訴訟を提起した。事故が事件に発展した。

富山県警もまた、事故当時、現場にいた関係者の事情聴取を行ない、02(平成14)年11月、研修会の主任講師と亡くなったふたりが属していた班の講師を業務上過失致死容疑で書類送検した。富山地検はふたりを被疑者として取調べ、徹底的な捜査を行なった。

こうして、事件は刑事事件としても展開することになった。しかし富山地検は04(平成16)年6月9日、容疑不十分でふたりを起訴猶予とする旨発表した。発表に当たって、富山地検は記者会見を行なって、処分は不起訴処分にとたとえたと説いた。ご遺族は不起訴処分に対して、異議申立を行なわないと発表した。

竹氏の指摘する民事訴訟の法廷における佐伯郁夫氏の大きな雪庇形成についての証言は、05(平成17)年7月13日に国(被告)側の証人として出廷して行なわれた。この時の証言がほとんど唯一の根拠となって、翌06(平成18)年4月26日、富山地裁は原告(遺族)勝訴の一審判決を言い渡した。被告である国側が控訴して審議は高裁に持ち込まれたが、07(平成19)年7月26日、両者は和解した。

「私の第一の疑問は、なぜ佐伯氏の認識（情報）が事故前に登山研修所を通じて、講師に伝えられ、生かされなかったか」と竹氏は言うが、右の通り、佐伯氏の認識が明らかにされたのは平成17年になってからのことであった。事故前に佐伯氏の認識が存在し、知られていたとはいえない。地元の登山家が佐伯氏の認識を共有していたという事実はない。それが文登研に伝えられたという事実も、私の知る限りない。

竹氏の第二の疑問、「なぜ佐伯氏の証言が業務上過失致死罪の時効の後（正しくは不起訴処分決定の後）に明らかにされたか」についても右の通り、佐伯氏の認識が明らかにになったのは刑事事件が終焉したあとであったのである。明らかにされたのは法廷であったのだから情報を秘匿することなどは到底不可能な場であった。情報は操作のしようがない場であったのである。だから、日本山岳会会員による情報操作の疑いなどということはまったく根拠がないし、あり得ないことなのである。

和解金が国庫から支払われた、国民の税金が使われたという点に

ついてはそのとおりである。税金の使途の説明責任は当然、国、文科省に帰すべきものである。

大日岳の事故は民事と刑事両事件を生み出した。ふたつはそれぞれ独立に展開し、それぞれに収束した。

二度とこのような悲しい事故を起こさないために、徹底的な原因究明と今後の対策を検討する必要がある。事故は前述のように、大日岳山頂付近の積雪が大規模に崩壊して雪崩を惹き起こしたことに起因している。多くの人は雪庇の崩壊、崩落と呼んでいるが、大日岳山頂付近の積雪を単純に雪庇と呼ぶのは正しくない。

雪庇は山稜付近で風下側斜面上部に庇状に突き出た構造を指すとして、1930年代にヨーロッパで詳しく研究された。日本雪氷学会の定義によると、雪庇は庇があるかどうかは問わない、風下側にできる吹き溜まりをいうとしている。山稜部にできる庇状の構造は踏み抜きの原因になると怖れられ、冬山の危険のひとつとして注意されてきた。が、日本のように温暖、多雪地の積雪構造は大日岳型の吹き溜まりにもっと注

目されてしかるべきではないか。

雪氷学の権威である秋田谷教授が座長を務めた大日岳事故調査委員会は、大日岳のような大きな規模の雪庇は見たことがない。調べた記録もないとした。斯学の最前線にある研究者ですら知らなかった吹き溜まり型の雪庇の形状、構造、形成を明らかにしたのは05（平成17）年4月の現地調査であった。これまでに知られていなかった積雪構造をあきらかにし、事故の原因解明に著実な一歩を記した。この調査以前に、大日岳型の積雪構造に関して信頼するに足る知見は存在しなかった。

地元の経験豊かな登山家である佐伯郁夫氏が大きな雪庇の存在を知っていたとしても、それは私的な経験にとどまっていた。立山山麓の山岳ガイドの村、芦峯寺では早月尾根には両側に雪庇ができることが伝えられている。どの谷にどちらの側にどんなものができるかということまで、村の会員には伝えられてきた。経験が、伝承される知識、伝統的な智慧となつて活かされるようになるためには、何代にもわたって、多くの人々に検証される必要があるのである。

地元にはあるはずの、そういう知識、智慧を収集し、蓄積する努力は必要である。登山者ひとり一人にその努力が求められるが、文登研はより組織的にその努力を重ねる責務を負っていると考ええる。

事故のあと大学山岳部リーダー冬山研修会は開催されていない。すでに8年以上にわたって、若い世代の冬山研修が放棄されたままになっている。文科省が日本のスポーツ、文化の振興に真に責任を負っているというのなら、国の責任で研修会を直ちに再開するべきである。



太田 敬 (おおた・たかし)

2008年7月24日病死(享年92)

1916年3月、神戸生まれ。灘中学入学とともに登山を始め、1933年、慶応大学入学で山岳部入部。

1941年3月、日本山岳会入会(会員番号1899)。

1992年、名誉会員に推挙。

太田さんは慶応山岳部の先輩で、1958年、27歳の私が山岳会に入会した時の紹介者であった。太田さんは1933年、関西の名門灘中学から慶応大学に入り、中学時代に続いて山岳部に所属し、本格的な山登りを始めた。創立早々の灘中の1年生のとき、大台ヶ原から熊野路を瀧八丁まで歩く1週間の山旅で、山登りの第一歩が始まった。そして灘中、慶応、日本山岳会と、1928年から2008年まで80年の長い道のりを歩き通された。特に山岳会では、

1958年から1980年まで理事・幹事・評議員を務められた。私が慶応の後輩としてお目にかかったころは、すでに太田さんは会の中核で仕事をされていた。太田さんの山登りというより一生は、学生時代から1939年に東京海上に入られたのちすぐに兵隊にとられ、1945年に終戦で帰国された2年後、戦後で初めて単独で六甲山に登ったときから再開された。しかし、その後ポリオに罹られ3年の間、闘病生活された。病いが癒えてまた山に還られた太田さんは、札幌支店勤務で2年間、北海道の山を歩かれ、197

★
追

OBITUARY

悼

8年、東京海上を退社されて自由な山の世界に入られた。

太田さんの山登りはまことに多彩で、昭和12年度の慶応山岳部の会報である『登高行』に「大きい山登りと小さい山登り」という一文を残されている。太田さんはそのなかで、激しいアルピニズムを追求する山登りとひとり好きな山を歩く単独行に分けて、山登りのことを書いています。

太田さんの慶応時代は、当時の日本の山岳界が競って積雪期の北アルプスの穂高や剣岳に登ったように、太田さんも激しく氷雪の剣・穂高に挑んだ。とくに剣の八ツ峰の積雪期初完登に全力を傾けた。一方、太田さんはひとり静かな山歩きも楽しまれ、絵もよく描かれた。太田さんの単独行は、1979年の記録を見ると年間17回の山行のうち11回に及んでいる。晩年、昔の山を思い出されては小冊子を出されて送ってくださったのが、今は懐かしく思い出される。激しく山に対し、優しく山にふれた太田さん。そして日本山岳会をこよなく愛した太田さんのご冥福を祈ります。

川崎精雄氏を悼む
——
藪山、そして音楽と俳句

宮下啓三

奥秩父の西麓、金峰山を東に見る宿舎での夜の情景がなつかしく思い起こされる。かつて多くの登山者の宿となった有井館に、木暮理太郎を偲ぶ人々が集まった時のこと。川崎さんが「90歳になりました」と言うのを聞いた私が半身像をスケッチして、記念品として進呈した。翌日、水晶峠近くの峰から富士山を遠望しようとした私たちは、登り口で川崎さんに待っていてくれるようにと言って登りはじめた。ところが私たちが頂上に着いて10分と立たない間に川崎さんが姿を見せた。90という年齢を感じさせない健脚に私たちは驚嘆した。

その川崎さんは、学生時代に日本アルプスで登山修行を積んだ後に、会社勤め人間になってから登山の仕方を一変させた。大学山岳部間の初登攀ゲームの登山から脱して、独自の登山スタイルを作り上げた。「登山を理由にして会社を休んだことがない」と聞いたことがある。時間的な制約のなかで、川崎さんは実によく山に登った。



川崎精雄 (かわさき・まさお)

2008年8月14日病死(享年101)
1907年1月、神奈川県生まれ。中央大学山岳部OB。同大学卒業後は、とくに利根川上流から奥只見にかけての未開の山々に足跡を残した。1947年6月、日本山岳会入会(会員番号3043)。1998年、名誉会員に推挙。著書に『雪山・藪山』(山と溪谷社)、『山を見る日』(中公文庫)、山の句集『冬木群』(茗溪堂)などがある。

峰の高さや数に対するこだわりをすべて捨てて、独自の境地を作り上げた。藪をかき分けて登ることに自分の登山の個性を見出した。勤務生活を大事にしたため海外での高峰登山は思いもよらなかった。それで、いっそ徹底的に日本の風土に合った登山をきわめようという心意気が川崎さんを突き動かした。いわゆるアルプス風の山と異なる相貌の山々で、繁茂する植物をかき分けることに登山の醍醐味を見出そうとした。その結果「藪こぎ」が川崎さんに独自の境地を楽しませることになった。

川崎さんの数多い紀行文のここかしこに表現されている。個性的な登山をただの身体運動にとどめない独特の感性が、そこで文章に得がたい味わいを生む。求道者のごとき真剣さで山と向き合う人であつたけれども、紀行文を読めば、山の奥深くの里や谷に住む人たちの温かい眼差しに心なごむ思いがする。個性的な登山の楽しみ方の手本のひとつとして川崎さんの流儀は、日本登山史において語り継がれるべき価値をもつ。

川崎さんは俳句の会の同人だった。句作によって晩年に山火賞を受けた。藪山に分け入る人の風雅な一面が句作に表わされた。個性を存分に発揮する登山人生をまつとして100歳を超えた川崎さんから私はいろいろ刺激された。そのことへの感謝の念を込めて、私は衷心よりご冥福を祈る。

活動報告

自然保護委員会

八丈島自然観察会

東京・竹芝桟橋から300^{キロ}。

上陸すると、そこは南方の異国かと錯覚させられるような洋上の小島であった。メインストリートにはヤシの街路樹が並び、ハイビスカスの赤い花が点々と彩りを添える。小道に逸れると、玉石垣の道が現われ、スタジイ、タコノキ、アロエなどがこれでもかと、南国ムードを盛り立てる。そして小道や広場に敷かれたスコリアと呼ばれる火山礫の赤砂利や、ところどころに転がっている溶岩の塊が、ここが火山島であったことを思い起こさせる。

今回の計画は、島に2つある山、東山(別名、三原山、701^{メートル})と西山(別名、八丈富士、854^{メートル})に自然観察登山をするとともに、八丈植物公園でも自然観察し、

併せて温泉など島内観光もしようというものであった。

8月24日朝、参加者29名が民宿・柳家荘に現地集合する。前日から来ていた会員もいる。さっそくタクシーに分乗して東山へと向かう。しかし出発とともに雨が降り始め、山に入っていくと猛烈なスコールとなる。登山口となる標高400^{メートル}ほどの無線中継所前まで行くが、猛烈な降りですぐに降りることができない。登山は中止し、日程を変更して植物公園へと向かう。

ビクターセンターに入り、施設見学の後、今回の講師・西条会員(岐阜大学)による座学となる。おもしろい話であったが、その間に雨も上がり、講義は野外自然観察へと展開。雨上がりの昼下がり、ムシムシするなかで、やぶ蚊に食われながらであったが、名解説に会員諸氏の植物知識は大幅に増加したはずである。これで1日目の

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

公式日程は終了。三々五々、歩いて民宿まで帰る。そしてこの歩くということが、さらに旅の印象を深めてくれるのであった。夜の盛大な懇親会はここで報告するまでもない。

翌朝は全員さわやかに目覚める。が、天気は快晴というわけにはいかない。早朝、海まで散策するグループもいくつかあった。朝食後、バスで標高550^{メートル}の八丈富士登山口へ向かう。登り始めてすぐに西条講師による自然観察会が始まる。登りはゆっくり、小雨が降り始める。しかしこれはじきに上がり、みんな1280段の階段登山道を登っていく。山頂に着く頃から天気は晴れ上がり、上天気のなかのお鉢めぐりとなった。海に囲まれた円錐形の山頂はイヌツゲに覆われ、リュウキュウツヤハナムグリの乱舞する360度の展望を持つ、雄大な山上の楽園であった。火口に下り、浅間神社に参拝。ヤマグルマの純林も近い。下山はふれあい牧場を目指す。大汗をかいた後での搾りたて牛乳は格別であった。

民宿へ向かう帰りのバスの中で、次の計画へと話は弾む。小笠原と

いう声が圧倒的に多い。神津島から始まり、今回の八丈島、次は小笠原となると、これは辺境探検を標榜してきた日本山岳会の面目躍如といったところか。筆者の島旅文化論構想にもますます内容が加わりそうだ。

(田中純夫)

三水会

第19回野美の市懇談会

平成元年に端を発したこのオークション懇談会は、もはや夏休みの年中行事として定着し、今年は8月2日に実施された。

特に今回は、故・今井喜美子名誉会員夫妻の遺品がご遺族から寄せられ、登山帽、ザック、山のコスチュームなど、思い出の数々の話題に盛り上がった。久しぶりに参会された松田雄一名誉会員からはエヴェレスト登山時の記念品、スタンプ、頂上のパノラマ写真などが出品され、人気を博した。

毎回多数の登山用品を提供いただく柴田会員からは、1960年代の門田の穴あきピッケルをはじめ、最新式の発光ダイオードのランプ、双眼鏡、その他門田の鍛造

中村保さんの英国王立地理学協会メダル受賞祝賀会



お礼の挨拶を述べる中村保会員

170年の伝統を誇る英国の王立地理学協会から、6月2日、中村保会員がバスケット・メダルを授与された。1990年から、中国西南部、「ヒマラヤの東」と呼ばれる東チベットの辺境部を29回にわたって踏査し、未知の山域を写真と地図によって内外に発表してきたことが評価されたものだ。日本人とし

ては初めての名誉ある受賞である。そこで平山善吉前日本山岳会会長が代表世話人となって、日本山岳会、国立極地研究所、日本地理学会、日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本ヒマラヤ協会などに呼びかけて、中村会員の受賞祝賀会が、9月30日、東京・八重洲富士屋ホテルで開催された。当日はそれぞれの団体から約180人が出席、中村会員の受賞をお祝いした。スライドによる中村会員の講演が、集まった参会者たちの関心を呼んでいた。

8本爪アイゼン、マニアル一眼レフカメラなど、1000点以上の品々に入札の選択に戸惑うほどであった。

入札、開票、落札の結果はそれぞれセルフサービス。以後の集計・精算などの事務処理はベテランの女性会員があたり、出品者への割戻しまで含めて驚異的スピードで完了。

16時過ぎから開始した懇親会には有志持込の料理や飲物が並んだ。冷えたビールで乾杯！ その味は格別で、和気藹々の話し合いは17時過ぎまで続いた。(勝田房治)

東 西 南 北

ヘルマン・ブール夫人との会見

平井一正

1957年、シュツムツクを隊長とする4人のオーストリア隊が、カラコルムの未踏峰ブロード・ピーク(8047^{メートル})に初登頂した。その後、隊を2つに分け、ヘルマン・ブールとクルト・ディームベルガーがチョゴリザ(7654^{メートル})に挑んだ。そして6月27日、2人は頂上を目指したが、天候悪化のために、引き返した。その帰途、先頭を歩いていたクルトが気配で振り返るとブールの姿はなかった。雪底から転落したと思われる。

ブールは1953年にナンガ・パルバット(8125^{メートル})に、単独で超人的な初登頂をしたことで、全世界に名を知られた有名な登山家である。

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

その翌年1958年、桑原武夫を隊長とする京都大学学士山岳会がチョゴリザに初登頂した。そして1年前に遭難したブールのテントを6700^{メートル}地点で発見した。テントの中に残っていた遺品を回収し、それをBCを訪問したイタリア隊に託してブール未亡人に渡してくれるように依頼した。

月日は流れ、今年は初登頂から50年になる。それを記念して、2008年9月14日、チョゴリザ初登頂者の私は、長年の懸案であったブール夫人(82歳)を南ドイツ、オーストリアとの国境近くのラムソウに訪ねた。ブールの仲間であったクルト・ディームベルガー(75歳)もイタリアのボローニアから来てくれた。チョゴリザに縁のある3人が一堂に会することができたことを、お互いによろこんだ。ブール夫人は、スキーで足を骨折したために杖をついているが、



ブールの記念碑の前で(左からクルト、平井、ブール夫人)

たいへん元気であり、日本隊に対して感謝と尊敬を述べていただいた。彼女はここでハウス・ヘルマン・ブールというペンションを経営している。その一室にはブールの記念の品々が展示されていて、偉大な登山家を偲ぶにふさわしい場所となっている。

ブールの出身地であるラムソウは小さい村であるが、観光地として多くの観光客が来る。その村役場の入り口の横に、花で飾られたブールの記念碑が建てられていた。ナンガ・パルバット初登頂50周年を記念して建てられたという。

50年前のチョゴリザ遠征で出会ったアメリカ隊、イタリア隊との

邂逅に続いて、今回のブール夫人との邂逅は、チョゴリザ初登頂をめぐつての国際的な友好関係を築くものとして、嬉しいことであり、私にとってまさにチョゴリザ初登頂以来のロマンの完結でもある。ブール夫人とクルトからは、11月3日に京大で予定しているチョゴリザ初登頂50周年に対する祝賀メッセージをいただいた。

クマと格闘して生還した登山家の山野井泰史さん

近藤幸夫

長年、山登りを続けているベテラン登山家でも、山行中にクマに出くわすことは少ない。ましてやクマと格闘したケースは珍しいだろう。そんな貴重な経験を、世界的な登山家の山野井泰史さん(43歳)が味わった。顔面に70針、右腕を20針縫う重傷を負いながら「奇跡の生還」を果たした山野井さんと現場を訪ね、事故当時の記憶をたどってもらった。

9月17日午前7時、山野井さんは、奥多摩湖を望む高台にある自宅を出た。目的はトレーニングの



現場でクマとの格闘を再現する山野井さん

ため、倉戸山（1169^{メートル}）周辺の杣道や散策道を全力で駆け抜けるトレイルランだ。

自宅裏の畑を抜けると、いきなり急斜面の山道になる。私が「ここを走るんですか？」と聞くと、「もちろんです」。5分くらい登ると、倉戸山の分岐点。ここから、踏み跡程度の杣道に入る。山野井さんは「時どき、僕が石をどけたりして補修している」と言う。

300^{メートル}ほど歩くと、散策道に合流する。幅1^{メートル}程度の道で、土留めがあるなど、よく整備されている。傾斜も緩く、ここなら快適に走れそうだ。さらに約200^{メートル}進むと、高さ1・8^{メートル}ほどの鉄製ゲートがあった。ゲートの両脇か

らシカよけの鉄製の網のフェンスが張られていた。

扉を開けて山野井さんは「まさかこの先にクマの親子連れがいると思わなかった」と緊張した表情になった。少し登り、緩いカーブを抜けた約50^{メートル}先で、「まだ血が残っているかなあ」と木製の土留めを指した。

事故当時を振り返ってもらった。谷側は急斜面のため、足元に注意を払いながら全力で走っていた。

いきなり、前方から「グワッ」と大きな咆吼がした。顔を上げるとクマが突進してきた。後ろに子グマがいる。1、2秒で、組み付かれ、右腕を噛みつかれて引き倒された。激痛が走る。体長約1^{メートル}、体重60^{キログラム}くらいか。ものすごい力だ。

さらにクマは顔面に噛みついてきた。憎悪に満ちた母グマの目が光る。鼻の根本を噛みながらほえ続けている。ひじで押しのけるなどの抵抗をした。「10秒くらい噛まれていたでしょうか。痛みと恐怖で何度も意識が飛びそうになった」。クマが口を離れた瞬間、脱兎のごとく走った。フェンスを開けてひたすら逃げた。

恐怖で前しか見ていない。だが、

ほえ声が続く、クマに追われているのがわかる。200^{メートル}ほど先で振り返り、クマが戻っていくのが見えた。鼻からの血がのどに入っ

て苦しい。冷静になり、「失血死するのではないか」と不安がよぎり、左手で右手首を押さえて止血して歩いた。

無事、逃げ切って隣家に助けを求め、救急車を呼んでもらった。重傷だったが、1週間入院し、抜糸もすんで元気になった。山野井さんは「今回のケースは前方不注意の僕が悪い。クマからすれば人間が襲ってきたと思ったの

ではないか」と書いてあるのを読んだ。

私はアッと思った。

平成17年11月10日に出版された山と溪谷社の『日本登山年表』の7^{ページ}と『目で見る日本登山史』の46・47^{ページ}の文に、私の曾祖父の名前「梨羽時起」が「梨羽晴起」になっ

ていて、そのことを思い出したのだ。

曾祖父、梨羽時起のいっ

梨羽時春

中学時代に友人と夜叉神峠に登った。帰宅すると祖父が「お前のひいじいさんは南アルプスの赤石岳に登ったんだぞ」と言った。それを聞いて私は海軍軍人がなんで赤石岳に登ったんだろうと思った。その後、曾祖父（梨羽時起）が

『三角点の探訪』（上西勝也）によると、「昭和2年の日本山岳会『山岳』第二二年三号の68^{ページ}に書かれている「梨羽晴起」は「梨羽時起」の間違いではないか」という記述がある。この指摘のとおり、間違いないのである。自分のご先祖の名前の間違いであるので、思いきって投稿した次第である。

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

北海道支部

第9回自然児学校を終えて

子どものうちから自然に触れ、自然と付き合いながら、その尊さを学んでいくという伊藤秀五郎第二代支部長の理念の実現と、支部の自然保護活動の重要事業として始められた自然児学校は、今年で9回目を迎えた。開催時期は7月下旬から8月上旬。向井成司元副

支部長の膝元、新冠町新冠川上流域が開催地の中心となっていた。

2000年8月、2泊3日で始まった学校は参加小中学生が6人であったが、第2回からは3泊4日に延長され、参加児童も毎回15人から20人に増え、特に台風災害に遭遇した第4回は最多の31人の子どもたちが参加していた。

学校では、テント生活をしながら周囲の自然を利用しての登山、ツリークライミング、川遊びや自

然観察、動植物についての学習などを中心としたカリキュラムをこなしながら、飯ごう炊飯、バーベキュー、パン作りを行ない、豪華なキャンプファイヤーを囲みでの歌唱指導、打ち上げ花火を楽しみ、携帯トイレの使用実習も行なった。第5回からはテント設営地を松本健会員の所有地に定着し、プレハブなどを利用するなど、学校運営がしやすくなった。

学校運営費用は、参加児童の会費（現在は一人1万円）と会員・会友から寄せられた基金で運営しており、生徒募集からカリキュラムの作成や給食計画に伴う食材購入、フィールド活動の指導、医師である会員による医療保険などすべて手作りで運営している。装備面は会員所有のテントを持ち寄り、支部購入のガス炊飯器や大鍋などの調理器具のほかは個人のガスコンロなどを借用し利用している。



納屋を利用したツリークライミング

今年の学校は7月31日から8月3日の日程で開催。嬉しかったことは、今年高校生となった学校OBがアシスタントとして参加してくれたことである。2日目の登山終了後、降雨が続く、参加の小生18人と中学生3人は屋内でのツリークライミングや、懸垂下降の体験訓練に取り組んだ。また雨の合間に薪割りや、キャンプファイヤーを行ない、カレーライスや空き缶炊飯などを体験した。

参加した子ども達の安全を第一に、さまざまな状況に応じながら3泊4日間をサポートする実行委員には大変な労苦を強いるのであるが、日本山岳会の公益事業推

進の一端を担っているということに意義を感じて取り組んでいる。来年は10回を数える。さらに充実した運営を目指して努力する方針である。
(高橋宜也)

岐阜支部

第2回全国森林づくり連絡協議会開催

第1回は2008年1月12日、東海支部の主催で同支部のルームで開催された。2回目となる今回は、じっくり討論しようというこ

とで、8月23日～24日の2日間にわたり開催した。初日は、岐阜駅内の施設で連絡協議会が開かれた。参加者は本日より吉永英明常務理事、高尾の森より5名、東海支部・猿投の森より4名、京都支部3名、関西支部2名、広島支部2名、岐阜支部13名、合計30名の参加があった。

まず、吉永常務理事より日本山岳会での森林づくりに対する考え、法人化の現状などの報告、引き続き各支部の活動状況や問題点について報告された。また、都合で欠席となった青森・千葉・山陰・宮崎各支部については、関係者より

簡単に現況報告がなされた。

今回の連絡協議会では、なぜ日本山岳会が森林づくりを行なうのかが話題となった。現在、山岳地帯が荒廃し、毎年土砂崩れや鉄砲水などによる事故が多発している。山岳地帯での森林づくりは一般のNPO活動では危険であり、山岳会の範疇であろう。

日本山岳会会員のなかには反対も多いと聞いているが、当会が世間に認められるには公益法人化が必須であり、そのためには森林づくりが大きな柱となり得るのではないだろうか。会員の皆さんに理解していただけるようなPRの必要があるだろう。例えば年次晩餐会などの場を借りて理解を求めているのだろうか、などの意見が出た。夜は親睦会を開催し、遅くまで活発な意見交換がなされた。

2日目は心配された雨も上がり、岐阜支部の活動場所である「権現の森」を視察した。元気な人は奥美濃の名山である小津権現山(158^{メートル})に登頂した。

今回は来年の2月28日～29日の2日間、東海支部の担当で開催予定である。多くの方々の参加をお待ちしております。(早田道治)

夏季山行——霞沢岳

8月29日、岐阜の7人と関東からの3人が上高地で合流し、小雨のなかを徳本峠に向け出発した。大正12年建築の徳本峠の小屋は今なお健在で、電気もなく昔のままである。

翌朝、小屋の外へ出てみれば雨。5時10分、霞沢岳に向けて小屋を出発。シラビソの樹林帯を急登してジャンクションピークに着く。ここからは、せつかく登った標高の半分近くを下る。水溜りのような池やガレ場を通り過ぎ、お花畑で休息。ハクサンフウロ、トリカブト、マルバダケブキに混じったリンドウの小さな蕾に夏の終わりを感ずる。

その後、小さなアップダウンを何度も繰り返す。樹林から灌木に変わる頃、右手に六百山の岩の混じる堂々とした山塊が見えてきた。K1のピークまでは段差の大きな急登となり、岩やロープをつかんで緊張の連続である。K1に着くと頂上は同じくらいの高さで先に見えていた。K2ピークを過ぎ、なだらかなハイマツ帯を行くと二等三角点があった。

10時25分、念願の霞沢岳山頂である。私たちの登頂を待っていたかのように雨は上がり、奥穂高、前穂高、ガスのなかに笠ヶ岳までも望むことができた。達成感を分かち合いながら記念撮影。

食事を済ませ下山開始。往路は目に入らなかったが、トウヤクリンドウがいくつも咲いていた。K1を慎重に下り、アップダウンにとりかかるころ、再び雨が降り出した。雨は本降りとなり、登山道に沿って雨水が流れだし、足元は滑りやすくなった。濁った池の最低鞍部からジャンクションピークまでの登りは本当に長かった。やっと小屋に到着。預けた荷物を

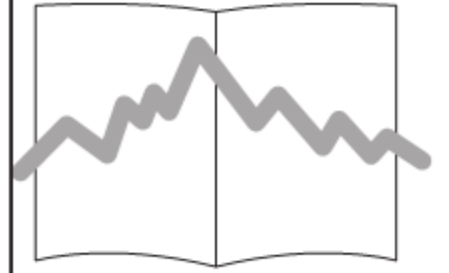


上高地、嘉門次小屋にて

を受け取り、明神へ向かって最後の下りにかかる。休めば歩けなくなるような気がしてノンストップで嘉門次小屋へと向かった。小屋到着は16時15分。行動時間は11時間を超え、標高差の合計は2800^{メートル}と、長丁場であった。

翌31日はなんと晴れ！当初の計画では「ひょうたん池」を往復の予定だったが、藪に残る雨露と昨日の疲れもあって次回に楽しみを残すことにした。

7時30分に小屋を出発。山研とビクターセンターに立ち寄り、平湯へ戻って解散した。(久野菊子)



図書紹介



松方恭子・編

『妻におくった九十九枚の絵
葉書——伊藤愿の滞欧日録』



2008年7月
清水弘文堂書房刊
A5判 335頁
定価 2100円

本書は、編者の松方恭子さんが、父である伊藤愿というひとりの男性の足跡を丁寧に拾い集めたものである。

甲南高校時代の山岳部の部報や日本山岳会の会報報告、またヨーロッパ視察の旅から家族に宛てた葉書をとおして、父として、友として、岳人としての伊藤愿という人物の輪郭がくっきりと浮かびあがる。

単独で滝谷と小槍の登攀を成しとげた、旧制の甲南高校時代の槍平をベースにした2週間の報告は、

山への傾斜と一途さが感じられてみずみずしい。ちなみにその頃、彼は大島亮吉の遭難に偶然に居合わせ、捜索にも加わっているという。

また京大時代の伊藤は、パウ・バウアー著『ヒマラヤに挑戦して』の翻訳を手がけ、ポーラーメソッドを「極地法」と訳し、その実践にも力を注ぐ。そしてその後も、早い時期からK2登山の許可の交渉に当たっていたことや、マッターホルンに単独で登ったことなど、逸話にはこと欠かない。

一方、タイトルにもなっている家族へ宛てた99枚の葉書には、夫として、そして父としての愛情が満ちている。1日3通の葉書が書かれている日もあって微笑ましい。48歳という若さで父が逝った時には、まだ小学生だったという編者にとっては、本書の出版までの時間こそが、「父と娘の時間」だったのかもしれない。

松方三郎、横有恒、西堀栄三郎、島田巽といった名前があららに登場し、ページをめくると、あの良質な時代の風が吹いてくるようだ。
(三好まき子)

出利葉義次・著

『K2苦難の道程——東海大学K2登山隊登頂成功までの軌跡』



2008年7月
東海大学出版会刊
四六判 290頁
定価 2310円

ベースキャンプから見上げる挑戦者を威圧するような巨大なピラミッド。K2の存在感は圧倒的だ。標高こそエヴェレストに譲るものの、その登頂の困難さで他の高峰の追随を許さないK2。その南壁の肩に突き上げる南南東リブ。本書は2006年夏、この「非情の山」に東海大学登山隊を率いた隊長による迫真のドキュメントである。

「夢の実現」から「その後の登山隊」まで15節に語られる、若いクライマーとそれを支える東海大学といううらやましいような組織。

衛星通信・気象に関する綿密な情報戦略と医師二人、看護師一人という医療チームが参加した総合大学の力。準備から登頂へと書き続けられるなかに、随所に語られるエピソードが本書を生き生きとしたものにして読者を飽きさせない。

そして登山隊の記録はやはり頂上攻撃からおもしろさが始まる。本書もその例外ではない。それは登山本来の迫力・登攀の緊迫感・自然の力の偉大さによるものだ。次々と突き付けられる難題苦行。アタックに入って強力な隊員の突然の離脱、残された若すぎる二人だけの8000メートル。アタックから実に一週間後の奇跡的な生還。白眉はなんといっても小松隊員の活躍である。彼女は言う。

「生まれてきた瞬間を思い出すよな、そんな気さえた。太陽、そして雲や風が、二人に「生きなさい」と言ってくれている」

高所の魔力・ショルダーに眠る85年のブラックサマーの死者たちの死への誘いの声から逃れてきた二人。生還した若い二人を称えよう。二人はよくその力を発揮して登頂を果たしたのだから。

しかしながら、日本女性初登頂・

最年少登頂、数々のスポーツ賞受賞と話題の多かった登山隊だが、その内実は実はきわどい薄氷の成功だったことは明らかだ。隊員構成の事情があったにせよ、登山隊としては登攀隊員不足のままに成立したように思われるし、アタックのサポート態勢の問題点も指摘できよう。本当に危うい登頂に対し、決断を下した隊長の指揮をとがめることもできよう。

それでも著者が最後まで注ぐ若い人たちへの温かくも厳しい眼差しと、隊長である著者自身が常に高所登山を実践していればこそ生まれる信頼感に基づくリーダーシップと統率力には敬意を表したい。

ともあれ、「夢見るだけでなく、それを目標にして成し遂げる努力をすれば、その夢が実現する」という冒頭の言葉がそのまま本書の主題である。そして本書はひと夏、K2に繰り広げられた苦難の物語であるとともに一人の指導者が若者たちに託した夢の記録でもある。登山を終えた隊員はそれぞれ生きていく。何より若い隊員、特に登頂者の二人には、この秋、奇しくも東海大の登頂したクラー・カンリの雪崩に倒れた中村進氏の

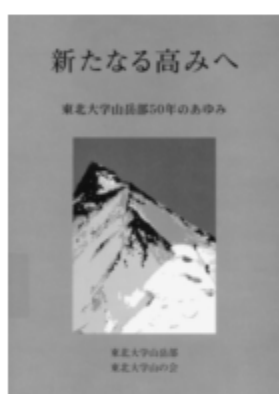
言う「これからは個人の豊かな創造性と自然への感謝の気持ちを持ちながら、自らの人間性を高めることを目標にした冒険の時代」を担うクライマーに育ってほしい。

なお、本書にはない写真は先に出版された報告書『K2 2006』（東海大学登山隊編）に、南南東リブについては本会の『日本山岳会青年部K2（南南東リブ）登山報告書』（96年）に詳しい。（絹川祥夫）

東北大学山の会 部史編纂委員会・著

『新たな高みへ』

東北大学山岳部50年のあゆみ



2008年5月
東北大学山岳部
東北大学山の会発行
B5判 466頁
非売品

本書は、本編（466頁）と資料編（293頁DVD付）の2冊組で、あわせて750頁以上の大部なものだが、ソフトカバーで読みやすい。旧東北帝大山岳部と旧二高山岳部のふたつを源流とする東北大学山岳部の50年の歩みを、よく保存されたぼう大な資料をもとにして、広範囲な視野で緻密に

描き出した大作である。

二十世紀後半の50年は、大勢の部員が長い合宿をしながら山に登るといふ「大学山岳部」的の山登りが隆盛を極めた時期といえるが、いまやこうした形での山登りは影をひそめ、歴史的遺産ともいえよう。この本はこうした「大学山岳部」への挽歌といえるかもしれない。本編は七つの章からなり、山行記録や思い出の記などのほかに装備の変遷や当時の食糧などについての記述など登山史的にも価値のある内容が多い。

私が心をうたれたのは「遭難省察」と「ルーム生活」の二つの章であった。「遭難省察」ではこの大学でも経験している山での遭難についてのすぐれた論評がなされており、さらに一世紀にわたる大学山学部の遭難のすべてが網羅されている表があるのに驚かされた。「ルーム生活」はまさに大学山岳部ならではの生活記録で、山だけでなく下界でも濃密な共同生活を営んだ仲間の生の息吹を伝えるもので、よく整理されていると感心させられた。タイムカプセルに納められた文章を読むような気分になった人も多いことだろう。

資料編にある整備された50年間の部員名簿の存在もたいしたものだ。たとえ1年間でもこの名簿に名前を記された人がこれを眺めた時の感慨の深さを思うと、よくぞここまで資料を整備して保存したものと敬服せざるを得ない。

これら山岳部関係の資料が大学の史料館に移管されて保存される由、夏目漱石や河口慧海に関する豊富な資料を大切に保管している東北大学のすぐれた伝統にもとづいたゆえの今回のすぐれた出版物の刊行があったのだと納得させられた。

（藤本慶光）

会務報告

平成20年度第5回(9月度)理事会

日時 平成20年9月10日18時40分

～21時

場所 日本山岳会会議室

【出席者】 宮下会長、神崎副会長、
宮崎・吉永・成川各常務理事、齋藤・
藤井・石橋・古野・太田・堀井・
相馬・山川・岡部各理事、竹中監
事、近藤常任評議員、神長会報編
集委員長

【委任】 鯉坂副会長、深川監事

【欠席】 日下田・河野各常任評議員

【審議事項】

1・中村保会員 (No.4837) の会
長特別表彰について(宮崎)

中村保会員は『Japanese Alpine
News』創刊号から2008年5月
(Vol.9) まで編集に携わり、その功
績は顕著であるので年次晩餐会に
おいて会長特別表彰を行なうこと
とする。(承認)

2・第16回日本山岳耐久レース
(24時間以内) ～長谷川恒男CUP

名義後援(協力) 依頼 (宮崎)

社団法人東京都山岳連盟および
日本山岳耐久レース長谷川CUP
実行委員会から当会の名義後援依
頼があったが、事故対策等につい
ての意見を付して承認することと
した。(承認)

3・映像資料二次使用について

海外取材番組エヴェレストへの道
『大地に生きて 植村直己と星野
道夫』(宮崎)

NHKエンタープライズから以
前(1970年7月) NHKが使
用した表記映像資料の二次使用に
ついての許諾申請があり、承認し
た。(承認)

4・資料借用、ならびに掲載許可 申請依頼 (宮崎)

株式会社十象舎から当会所蔵ウ
ェストン氏の写真を週刊『昭和タ
イムズ』58号に掲載したい旨の借
用申請があり、承認した。(承認)

5・山岳資料の写真撮影ならびに

書類掲載の許可について (宮崎)

一枚の繪株式会社からウェスト
ン氏の写真を月刊美術雑誌『一枚
の繪』2008年10月号に掲載し
たい旨の借用申請があり、承認し
た。(承認)

6・写真使用許可申請書 番組

『森の旅人 大自然がつくった絶
景 上高地の森・長野』(宮崎)

株式会社ドキュメンタリージャ
パンから表記番組(8月放映)使用
のウェストン氏および上條嘉門次
氏の写真を使いたい旨借用申請が
あり、承認した。(承認)

【報告事項】

1・会報『山』の記事に旅行業違
反の表現 (古野)

『山』7月号の「インフォメーシ
ョン」に2件の違反表現(旅行業
社名および登録番号記載不備)が
あった。今後かかることがないよ
うにガイドラインを検討の上提案
したい。

2・第11回子供登山教室」実施要
領 (宮崎)

宮崎支部から子供登山教室が実
施要領どおり実施し、無事終了し
た旨の報告があった。

3・森づくり連絡協議会報告(吉永)
森づくり活動を展開する支部等

で構成する「森づくり連絡協議会」
の第2回連絡会が8月23日に岐阜
市で開催され(13支部中6支部参
加)、出席要請に基づきオプザーバ
ーとして参加した。翌24日には岐
阜支部の「権現の森」を見学した。

4・日中韓学生交流登山報告(韓
国の仁寿峰・雪岳山) (吉永)

第2回の日中韓学生交流登山は
韓国山岳会主管で8月17日～24日
の間、韓国で開催された。本会か
ら9大学11名(内女性1名)の現
役山岳部員と慶應義塾大学OBの
森上会員がコーチとして参加し、
三国学生の交流親交を深めた。

5・平成20年度(第10回)秩父宮
記念山岳賞推薦一覧表 (宮崎)

推薦は3件(被推薦人4名と1
団体)あり、審査委員会に審査を
お願いする。

6・図書管理委員会 報告事項
(岡部)

図書室の資料データ管理用パソ
コンのリース期間満了に伴う後継
機種の入替が無事終了した。新機
種は使い勝手がよく、かかる費用
も格安である。

7・中村保会員の英国王立地理学
協会メダル受賞祝賀会 (神崎)
9月30日に行なう。

8・総務委員会報告(会員名簿編集、ルーム利用要領、年次晚餐会予定(宮崎))

(1) 会員名簿編集進捗状況は計画どおり。会員名簿記載個人情報等の機密情報保持契約を発注業者と締結した。なお、先般の全国支部長会議における名簿発行・配布に関する意見についての報告があった。

(2) ルーム利用要領 部屋、コピー機の呼称等を統一し、その徹底をはかっていく。

(3) 年次晚餐会の展示物等についての基本的考えについて報告。

9・訃報 太田敬名誉会員 (No. 1899、92歳) (宮崎)

7月24日逝去された。

10・訃報 川崎精雄名誉会員 (No. 3043、101歳) (宮崎)

8月14日逝去された。

11・山岳4団体三役懇談会報告 (神崎)

7月25日開催、宮下会長、神崎副会長、宮崎常務理事が参加した。

12・登山研修所の大学山岳部リーダー冬山研修会に係る安全検討会報告 (宮崎)

文部科学省登山研修所から報告書が届いた (図書室に保管)。

13・「山の記念日」について (宮崎)

読売新聞社から全国的に統一した日を設けることへの意見打診があった。既に各県ごとに定めているところもあり、今後慎重に本会としての対応を検討していきたい。

14・「名誉会員を囲む会」開催案内 (宮崎)

10月2日、主婦会館プラザエフにて開催する。

15・会報『山』9月号編集報告 (神長)

ルーム日誌 9月

1日 総務委員会 高尾の森づくりの会

2日 図書委員会 アルパインスケッチクラブ

3日 常務理事会 集会委員会 山岳地理クラブ

4日 アルパインスキークラブ 101の会

5日 海外委員会

6日 SUN燦会

8日 アルパインスキークラブ アルパインスケッチクラブ

9日 九五会

10日 理事会 山想倶楽部 休山会

11日 総務委員会 山の自然学研究会

12日 会報編集委員会

16日 山研運営委員会 資料映像委員会 アルパインスキークラブ

17日 アルパインフォトビデオクラブ 三水会 101会 00会 山岳地理クラブ

18日 科学委員会 資料映像委員会 つくも会

19日 海外委員会

20日 山の自然学研究会

24日 会報編集委員会 山研運営委員会 自然保護委員会 インターネット小委員会 麗山会

25日 総務委員会 海外委員会 定款検討委員会 山遊会

26日 アルパインスキークラブ

29日 総務委員会 自然保護委員会 千葉支部

30日 総務委員会 ゆきわり会 9月来室者511名

会員異動(9月)

物故

原田幹市 (3946) 08・9・12

安藤英弥 (4216) 08・9・5

遠藤宗男 (7047) 08・9・14

三田村庄一 (11195) 08・9・2

佐々木弘磨 (12693) 08・9・12

退会

山川三千雄 (6980)

山本幸男 (14103)

INFORMATION

インフォメーション



◆フィルムアーカイブのタベ 「1936・ナンダ・コット征服」

資料映像委員会

貴重なフィルム・日本初のヒマ
ラヤ遠征記録映画を上映します。
1936 (昭和11) 年、立教大学
隊 (隊長・堀田弥一) はナンダ・
コットに登頂、日本のヒマラヤ登
山を拓きました。今回は、隊長・
堀田氏のお話 (講演会DVD版)
を聞きながら、70余年前の海外遠
征から今日のヒマラヤ登山を考え
てみたいと思います。

会員外の参加も可能、山仲間を
誘ってお出かけ下さい。入場無料
です。

日時 10月30日(木) 18時30分より
会場 山岳会104号室
定員 40名 (先着順)
解説 羽田栄治資料映像委員長
問合 羽田栄治 (TEL 03-33399
13975)

◆「上高地山研」年末年始のオー ブンについて

山研運営委員会

正月を上高地で過ごしてもらお
うと、山研を臨時にオープンして
7年目となりました。今年も、年
末年始の5日間委員が常駐します。
仮設トイレと排水も完備してお待
ちしております。

期間 20年12月30日～21年1月3
日まで
申込 11月末までに、坂本正智宛
(TEL & FAX 042-373-338)

*申込者に詳細を送ります

◆山の自然学講座15周年記念講 演会「山から地球を考える」

山の自然学クラブ

講師・島村英紀氏 (元北大教授、
前国立極地研究所長) をお迎えし、
4人のコーディネーター (飯田肇、
大蔵喜福、中村華子、大森弘一郎)

を交えて、皆さんの疑問にお答え
しようというもの。

日時 11月29日(土) 12時50分～16
時50分

会場 東京国際フォーラム (G4
02号室)

定員 100名
費用 2000円 (学生1000
円) 当日徴収

申込 山の自然学クラブ本部 本
多麗子 (TEL 116-0001 荒川区町
屋5-15-21-206)

FAX 03-3892-0308
☒ zero@qb3.so-net.ne.jp

◆特別展「第6回日本山岳画協会 大町展」 大町山岳博物館

国内外の山岳風景画34点を展示。
小品の展示即売や、作者によるギ
ャラリートーク (期間中の毎週日
曜日13時30分、全7回) も行な
います。

期間 9月13日(土)～11月3日(月)
(9時～17時、入場は16時
30分まで)

問合 大町山岳博物館 清水宛
(TEL 0266-122-0211)

☒ koji.shimizu@city.omachi.nagano.jp
詳細 http://www2.city.omachi.
nagano.jp/sanpaku/

図書受入報告 (2008年9月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
全日本山岳写真協会(編)	山稜2008——2008年全日本山岳写真展作品集(撮影地図付)	221p/22cm	全日本山岳写真協会	2008	清水正己氏寄贈
堤信夫(著)	ロープレスキュー技術——Rope Rescue Technique	2151p/21cm	ナカニシヤ出版	2008	出版社寄贈
渡辺悌二(編著)	登山道の保全と管理(自然公園シリーズ No.1)	212p/21cm	古今書院	2008	出版社寄贈
大倉崇裕(著)	生還——山岳捜査官・釜谷亮二	300p/20cm	山と溪谷社	2008	出版社寄贈
近藤善則(編)	旧版地図リスト——(社)日本山岳会所蔵・旧版地図リスト	/30cm	JAC山岳地理クラブ	2008	発行者寄贈
池田昭二(著)	酒田労山の思い出——池昭語録	244p/30cm	池田昭二(私家版)	2008	著者寄贈
沖允人(編)	インド・ラダック地方 ザンスカールの山——中京山岳会ザンスカール登山隊	58p/30cm	沖允人(私家版)	2008	発行者寄贈
保谷昇他(編)	ふるさとの山 飛騨百山——飛騨山岳会創立100周年記念	193p/26cm	飛騨山岳会	2008	発行者寄贈
日本山岳会二火会(編)	日本最初の女性ヒマラヤ遠征登山隊の記録	/30cm	JAC二火会	2008	発行者寄贈
秩父宮雍仁親王他(著)	皇族に生まれて(Ⅱ)——秩父宮談話集	331p/22cm	渡辺出版	2008	出版社寄贈
三浦雄一郎(著)	冒険家——75歳エベレスト挑戦記	191p/21cm	実業之日本社	2008	出版社寄贈
三浦雄一郎(著)	75歳のエベレスト(日経プレミアシリーズ No.017)	226p/18cm	日本経済新聞出版社	2008	出版社寄贈
Warrell, David(ed.)	Royal Geographical Society Expedition Medicine	398p/21cm	Profile Books	2002	中村保氏寄贈

● さんけん通信 ●

斜光線の限定上映

山研管理人 内野慎一

9月、秋分の頃、山研に差し込む光から日が短くなったことと、日差しが低くなったことをしみじみ感じます。この時期の山研の楽しみは、朝、室内に入り込んでくる斜めの光が作り出す美しい光景に出合えることです。

山研のダイニングルームは東側のテラスに面しており、大きなふきだし窓が並んでいます。さらに窓際は吹き抜けになっていて、2階部分も窓になっています。そのため、壁面いっぱい上高地の林が映り、まるで水族館の大きな水槽を見ているようなダイナミックな光景が壁いっぱいに広がります。

そのなかで、特に目をひく主役はすぐ脇のカツラの木です。ちょうど緑から少し黄色くなり始めた葉に光が射し、その光は葉を透かして鮮やかな色彩となって室内に注ぎこんできます。山研に勤務する前のことですが、ある山小屋で登山者の方が話していたカツラの特徴、「丸いハート形の葉」「美しく黄葉する」「落葉したあとに甘い香りがする」という話が記憶に残っていました。そし



窓外に展開する美しい秋の上高地

てこの山研に勤務した1年目の秋、その「落葉したあとに甘い香りがする」を実際に体験して、大いに感激したものです。そして今ではこのカツラはすっかり愛着のある木になりました。

さてこの斜光ですが、色の美しさもさることながら、葉や枝が複雑な陰影をも描き、太い幹に模様を映し出します。その光の造形はダイニングの奥まで射し込み、壁や床やテーブルに影絵となって映ります。影絵の中では、風に木の葉が揺れ、小鳥の影が飛び交い、山研オリジナルスクリーンと化します。10月に入ると、朝陽は六百山に隠れてしまうので、この時期だけの「斜光線の限定上映」となるわけです。

9月は夏山と紅葉の端境期のように思われるかもしれませんが、山荘内でさえこのような光景に出合えます。散策されているなかにすばらしい光景を見つけられることでしょう。

平成20年度 年次晩餐会のお知らせ

年次晩餐会は12月6日(土)に開催されます。晩餐会は会員の方々が一堂に会し、親睦、交流する山岳会の催事です。

晩餐会にあわせ、今年の展示企画は、図書委員会による、山岳文化の根源となる当会所蔵の「山岳図書」の展示や、資料映像委員会とアルパインフォトクラブによる「山岳写真」などを企画いたします。別のブースでは支部、委員会、同好会等による山岳図書の展示、販売等も予定しております。また、講演会は「海外登山隊の報告会」をはじめ、「秩父宮記念山岳賞」の受賞者講演(審査中)等も準備しております。

日時 平成20年12月6日(土)午後6時開宴

場所 グランドプリンスホテル新高輪、国際館パミール「北辰」

会費 15,000円

＜晩餐会記念山行＞12月7日(日)「筑波山」

集会委員会主催による、北関東の百名山のひとつ「筑波山」を計画しております。筑波高原キャンプ場にて温かい「トン汁」をご用意します。

総務委員会

地震見舞い金、岩手支部へ送る

6月の岩手・宮城内陸地震でバスの転落事故に遭い、ケガをされた岩手支部員らへの見舞金を募ったところ、大勢の会員(個人)から9月末現在で29万円余が集まりました。当会からの見舞金(5万円)と合わせて岩手支部に送りましてのご報告します。なお個人からの見舞金は年内いっぱい受け付けます。

(常務理事・宮崎紘二)

◆編集後記◆

●『山』を編集していて、毎回、頭を悩ますのが巻頭の記事です。山岳会の会報にふさわしい巻頭記事とはどういうものか、先鋭的な内容も必要だし、時代を反映したものにもしたい。そう思うのですが、なかなかうまくいかないのが実状です。

●今月は、日本山岳会の登山隊から育ち、世界を舞台に活躍している竹内洋岳さんの登山に焦点を当てて、柏澄子さんにまとめてもらいました。少数の欧米人と組んでヒマラヤに挑む竹内さんの今後に期待したいと思います。

●世界的な登山家といえば、山野井泰史さんのクマとの遭遇も驚きました。九死に一生を得ながら、クマを気づかう姿勢が山野井さんらしいと思いました。(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 761号

2008年(平成20年)10月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュー・ハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 宮下秀樹

編集人 神長幹雄

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社